

イコール訪問記

今回は社会福祉法人萌葱の郷が運営している大分県自閉症・発達障害支援センター「イコール」センター長の、五十嵐猛さんにお話を伺いました。

津金澤：はじめに「イコール」という名前を伺って、ネーミングに興味をもったのですが、どのような意味が込められているのですか？

五十嵐：「**Enterprising Center for Oita Autism Life**」というスペルを略して「**ECOAL**」（イコール）と呼んでいます。このイコールには「大分県の全ての発達障害児者や、そのご家族が、周囲の人々となつながりを持って暮らしていけるような地域づくりを目指していきたい」といった、我々の理念的な意味合いも込められています。当センターの開所は今年（平成17年）の2月からですが、社会福祉法人萌葱の郷としては、過去14年間にわたり大分県内唯一の自閉症専門施設として、数々の処遇困難な事例に対応してきており、私達はその実践の中から、「自閉症児者に対してライフステージに応じた支援を一貫して提供する」ことの重要性を学んできました。更に、自主的な啓蒙活動の一環として、石井先生や杉山先生、寺尾先生、太田先生等といった自閉症療育の第一線で活躍されている方々にもご協力をいただき、普及啓発活動（セミナー）を県内で継続的に開催し、平成14年からは大分県の委託で「自閉症ライフサポートセンター」を発足させることによって、相談や施設研修、講演会等も定期的に行ってきました。こうした経過の中で感じていることは、私達の予想を超えた多様なニーズが年々増加してきていることです。当初は、めぶき園に来ていただく形の来園相談が中心だったのですが、次第に、教育現場で困っていることに対して、我々がお伺いして実際に現場での様子を見ながら支援計画のお手伝いをしたり、施設の現場からも同様に、対応に行き詰ってしまっている自閉症の方の現況を打開するための訪問相談が数多く寄せられたりするようにもなっています。このように、イコールは発足当初から相談や支援の要請が山積みされている状態なのですが、その中心になっていることといえば、やはり、発達障害の方が安心して通える場が少ないということに尽きるように思います。具体的には、学校では発達障害に明るい先生が不足していますし、卒業後に入所や通所の施設を希望されても、なかなか空きがない状態であります。そういった反面で、現在の福祉政策としては、地域福祉という方針に基づいて入所や通所型の療育施設を増やさないわけですから、代わりに地域のデイサービスや既存の施設のショートステイを利用することになってきます。では、そこで実際に自閉症の対応ができているのかというと、そんなに単純に済む問題ではありませんよね。デイサービスやショートでは環境や人員面等において経営が困難な状況におかれているため、その中で自閉症に対する専門性を構築させていくことはとても厳しいであろうことがうかがえます。そのため、自閉症の方の利用日数や活動が限定されてしまったり、通えなくなってしまうこと

も実際に出てきています。こういった現状からも、現場で療育支援の一貫性を実現するのは、今の制度体系ではなかなか困難なことであるとともに、「自閉症・発達障害支援センター」に課せられている役割は、とても重要な意味を有していることを日々感じているところです。

津金澤：なるほど、施設支援も「イコール」の主な役割になっているということですね。では、実際には、どのような形で支援をされているのでしょうか？

五十嵐：そうですね、学校や施設での対応の他に、行き場のない方からのショートステイの要請も数多くあります。先程も少し話しましたが、自閉症の方は学校の卒業後に通える所がなかなか見つからなかったり、見つけたとしても、継続することが困難であったりしています。「通える所がないから、ショートステイを利用したい」という選択自体が本来のショートステイの意図とはかけはなれてしまっているように思うのですが、とにかく、実際に通えるところがないため、ショートステイを希望され、それが、やがてロングステイになっていってしまう。このように、自閉症の方が地域で受け皿のないためにはみだされていくことに不自然さを感じています。施設側の事情としても、実際にはショートステイの支援費単価がビジネスホテルの宿泊費程度ですから、何処でも受け入れることを躊躇してしまうのが現状です。それは何故かというと、自閉症の方のショートステイというのは、生活の場を提供するだけの単なる宿泊利用だけにとどまらないですね。彼らの中には、慣れない環境に緊張して食事に箸をつけられなくなったり、夜間の睡眠リズムを崩してしまったりする方、ともすれば自分の気持ちをうまく相手に伝えられないことから不安を募らせて行動障害にいたってしまう方もいます。このように、デリケートな感覚を持つ自閉症の方をショートステイで受け入れる際には、場合によっては職員を一对一以上で配置したり、行動障害に適切に対応するための高度な専門性をもつ人材を提供したりする必要があります等、施設側のリスクは少なくありません。そして、更に、その施設全体のレベルというか技量も問われてきてしまうため、対応できる所も限られてしまいます。これについては、いろいろな機会に他の施設の方とも意見交換を行うのですが、ほぼ全国の施設がこういった実情を抱えているように感じています。我々は、ショートステイを利用されるご家族の事情も理解できるし、苦勞されているお気持ちにも共感しますから、本人や家族の方に経営優先で利用をお断りするようなことはできません。しかし、その折り合い部分を見誤ってしまうと、事故や人権侵害がおきてしまう危険性もはらんでいます。つまり、利用を希望する側の選択肢は限られ、その利用を受ける側も一点集中を受けていくことで、次第に施設で対応できる力も限界にまで追い込まれてパンクしてしまうことが懸念されるわけです。そのため、ご希望の全てを引き受けることもできず、私も正直なところ、既存の福祉政策の中では、この問題をどのように解決していけば良いのか、ちゃんとした答えを見出せていません。そのため、先日、大分県自閉症・発達障害支援センター連絡協議会

において、今後、この問題を取り上げて検討していくことにもなりました。現在のところでは、他に行き場がないと言われる方々に対して、なるべく、地域の資源にて支援体制を構築できるよう、地域コーディネーターの方とスクラムを組みながら、いろいろな関係機関を巻き込んで支援を行うように努力しているところです。しかし、本来、入所施設で対応すべき状態にある重篤な行動障害を有した方を、既存の地域サービスの中で対応していくには、まだまだ無理があり、結果的に、その歪がサービス受給者本人に出てしまっている事実は拭い去れません。この問題については、県内に限ることではなく、全国的なレベルでの課題であろうとも思われ、今後も議論を重ねていきたいと思っています。

津金澤：確かに、この問題は施設側の努力だけで改善できることではないと思いますが、我々、福祉施設の職員が常に利用者の立場にあり続けながら支援体制を整えるための代弁者となっていくことは大切ですよ。そういったことも踏まえて、ライフステージを通じた支援については、どのような考えをお持ちですか？

五十嵐：発達障害児者の支援は人材が全てだといっても過言ではないですよ。ですから、この人材育成が大きなポイントになってくるものだと考えています。大分県内では、発達障害の子どもを専門にしている方はいますが、それ以降の専門家が非常に少ないというか、彼らが大きくなってから対応できる支援者は極端に不足しています。具体的に申し上げますと、就労支援についてだとか、思春期、青年期を境に暴力行為が頻発して家庭が崩壊してしまうといった深刻な事例に対応できる専門家や機関は皆無といっても過言ではないでしょう。いろいろな施設を転々とされながら、その状態像を悪化させていき、最終的にめぶき園のショートステイを利用することで落ち着いていった方がこれまで何人もいました。しかし、今度はめぶき園から地域に帰すに際して、その受け入れ先を構築していくためには、環境面や専門性においても、多大な人材や機関との連携が必要とされることに気がついたのです。既存の制度では、これを実現することはなかなか難しい状況であります。実際に、過去に落ち着かれたところで地域に帰しても、1日で元の行動障害を伴う状態に戻ってしまう方もいました。こういった現実を目のあたりにしてしまうと、施設職員側も複雑な気持ちを抱えてしまうのですが、やはり、一番被害を受けるのは、当人とその家族ですから、現時点のように受け皿が確立できていない所で安易に地域生活をすすめることはできないと考えています。我々だって、地域で共に暮らすといった理想を掲げることに全く異論はありませんし、その実現に向けての志もあります。しかし、それ故に、みなさんに、もっとこういった現実にも目を向けていって欲しいと思うのです。また、学校においても、発達障害児の対応にはかなり苦労されており、親御さんのみならず、先生方からの相談も多く寄せられています。実際に話を伺っていると、学校は施設と違って、教員同士の協力関係がとりにくく、担任が一人で責任を感じて悩んだり、追い込まれたりしていることがまだまだ多くあるようです。何処の現場でも人員的な不足や悩みを抱えており、そ

の上、頼る所もなかなかない状態で、問題は山積みされていく。こうした中で、不安定になって、精神的な病に陥ってしまう方も実際に少なくありません。教員の心理状態が不安定な場合には、子どもと冷静に関わることや現状を客観視できない状態にあるわけですから、私達が行って話だけをしてもらってもかえって悪い結果を招く虞があります。このような場合、教育現場で精神的に孤立している教員の支えになることが必要とされることもありますし、なかなか教員の方の心を開けずに、前に進みにくくなってしまうこともありました。実際には、一緒に子どもの将来像を見通しながら連携をとっていくことが理想なのですが、そこまで辿りつくためには、やはり、まず、学校の教員全体が連帯して教育に取り組んでいただくことが重要であるように思われます。そして、そういった人的環境があるもとの、単なる技法として捉えるのではなく、教員として子どもに認めてもらえるような信頼関係を構築するためのものとして、障害特性に対しての理解を踏まえた技法や関わり方を伝えていけることが望ましいわけです。教員の抱える「どう対応したら良いかわからない」といった悩みを裏返せば、子どもは「誰を頼りにしていいかわからない」と困っているのですから、とにかく、子どもに頼られる存在になっていただくことを目指してもらおうことが、方向性としては、一番分かりやすい答えであるでしょう。むしろ、これが成立できれば、方法論に拘わらずとも、教育は実現されていくように感じさせられたことも少なくはありませんし、逆に、これが成立しなければ、どんなに素晴らしい技術をもって関わろうとも、望ましい結果は得られないだろうと思っています。どれだけ信頼をおける人が周りに居るか、これこそが、彼らが安心して暮らしていくためのポイントであり、そういった理由からも、子どもを専門としている方には大人になってからの状態像をキチンと把握していただき、そして、成人に関わっている方は、子どもの時の様子をしっかりと知っていただきたい。断片的な捉え方で関わるのではなく、このように支援者や教育者側がライフステージを通じた支援感覚を持ちながら繋がりあっていくことが大切なことであり、これが私の掲げているイコールの理念でもあります。

津金澤：なるほど、だんだんと「イコール」の意味も分かってきました。それでは、ライフステージを通じた支援の中で、就労については、実際にどのような支援をされているのでしょうか。

五十嵐：実質的な相談件数は少ないのですが、積極的に進めています。しかし、就労支援を始めてみて感じていることは、就労ということよりも、彼らにとっては、まず自分の居場所を見つけることが何よりも大切なことで、それが結果的に就労という形に表れていくことが理想であることがわかってきました。そのためにも、これも人材育成の話に戻ってしまうのですが、ハローワークやジョブコーチの方々にも発達障害についての理解を得るための研修を関係機関と連携して行い始めているところであり、この点については、これから、まだまだ自分たちが研修を積み重ねながら充実させていきたいと考えています。

津金澤：やはり、支援体制を追求していくと、人材の育成が話の中心となっていくようですが、既存の福祉体制の中で、具体的には、どのようにしたら地域での専門家を増やせるとお考えでしょうか？

五十嵐：個々が発達障害の特性について理解することや支援者の専門性を向上させることはもちろんですが、その専門家同士のチームワークにも着目する必要があると思います。これもイコールの理念の1つなのですが、当法人でもサービスの質を維持・向上させていくために、職員同士が共通理解を持つための場を設けながら事例検討等を行っています。これを軽視すると、職員間での対応がバラバラになり、結果的に利用者を混乱させるといった、質の低下を招くことになりかねません。また、自閉症の専門家を育てる意味での研修は、先に話した通り、児童から成人まで通して関わることも不可欠であり、その中でも、特に生活全般にわたって関わることができるのが入所施設であるため、そこでのスーパービジョンのシステムを有効に活用するべきであると私は考えています。講演会などでの啓発活動も大事ではありますが、「百聞は一見にしかず」と言うように、むしろ、実際に会って、接してみた上で研修者本人が抱えた疑問点などを聞き出し、そこで専門的な知識を伝えながら理解を深めていただくことが、一番伝わりやすい方法ではないでしょうか。車の免許をとる際に、実技のないプログラムなんて、考えられないでしょう。そういった観点から、今、我々は、当法人の現場を利用した研修プログラムを準備しているところです。対象者も、施設職員だけでなく、保育士や教員にまで広げていき、ライフステージを通じた支援感覚を養っていただくための研修を確立させていこうと計画しています。

津金澤：お話をお聞きしてきたところ、いろいろと先駆的なお考えをお持ちしていることがわかりました。最後に、五十嵐さんの持っているイコールの理念を実現していくための構想についてお聞かせください。

五十嵐：今後、我々は各関係機関との連携を密にしながら対応していくことが重要になってくると思います。支援センターはシンクタンクとしての役割を持ち、ランチに近い形として、各地域の拠点となる関係機関やコーディネーターを頼って、受け皿となる場所を開拓し、日常的な地域生活においてはヘルパーでも支援できるような専門性を育てていきたいと考えています。何故、このようなことをいうのかというと、先日、神奈川県の実石さんや、大分県の深見さんの講演をお聞きしていたら、親御さんやご家族の方が当人のために成されてきた地域交流のノウハウは、ヘルパーを利用することで可能になることは多いと思ったからです。ですから、先に話しましたことも含めまして、発達障害の専門研修を当法人のめぶき園（入所施設）やなごみ園（こどもデイサービス）等で行い、県や関係機関にご協力いただきながら地域でも支援ができるような専門家を育てる仕組みをつくっ

ていきたいと考えています。それと、今、私が熱心になっていることの1つに、彼らの社会的な価値観や役割を具体例に表していくことがあります。例えば、不良少年や不登校の子どもが彼らに出会って、その健気な生き様を見て自分の人生観を変えたり、自分の要求や価値観を一方的に押し付けていた教師が、彼らとの出会いで、自分の教育観をガラリと変えて、子どもの気持ちをととても大切にするようになったりしていることが実際にありますよね。これは、彼らが、障害があるとか、ないとかに関わらず、真理や本当の人との付き合い方を私たちに投げかけてきてくれているからだと思うのです。私はよく「〇〇君は教師のトレーニングマシンだ」と冗談のように言ったりすることがありますが、このように、彼らが苦勞して人や先生に伝えてきた恩恵を目には見えない形で我々が受けていることは多々あるわけです。また、絵画や切り絵、音楽等の芸術面で才能を開花している方もいますが、彼らの作品を見ると、人間の可能性や純粋な面を感じ、本当に感動させられるものです。こういった、彼らの社会的な存在価値をいろいろな人に認識していってもらうことが、ハンディキャップとしてではなく、対等な、イコールな姿勢をもって彼らを受け入れていく気持ちとなる鍵になるのではないかと考えており、これについては、もっといろいろな情報を集めながら整理していきたいと考えています。

津金澤：自閉症・発達障害の方々に対する五十嵐さんの熱い想いが伝わってくるお話でした。私もイコールの理念の実現を期待しておりますので、これからも頑張ってください。本日は、どうもありがとうございました。

(全自者協ニュース 第26号 2005.10.1掲載)